
LINE OF DEATH

v-star

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LINE OF DEATH

【Nコード】

N7546R

【作者名】

v - s t a r

【あらすじ】

同級生に誘われて始めた仕事

それは全てを変えることになった・・・

- 死線ノ先（前書き）

力チ力チ力チ力チ・・・

・死線ノ先

「おつそおおおい!!」

俺、柳田^{ヤナギダ} 利明^{トシマキ}はPCと格闘していた。

「言う事が聞けんと言つのか! けしからん!」

最近、PCの調子が悪い。

季節の変わり目だろうか?

3年ほど前までは苦に感じなかったのに……。

「古いからじゃね?」

背後でささやいたのはクラスメイトの小林^{コバヤシ} 泰斗^{タイト}。
家に招き、部下として歓迎してやっているのだ。

「お前に、な・に・が、分かるんだ?」

「いやだってそれ何年前のモデルだよ……」

格闘しているPCはデスクトップだ。父上が大金を提供して下さったおかげで買う事が出来たのだ。

「父上に買ってもつらったのだぞ。壊れるはずないだろ?」

「壊れたって言うてねえよ……。それにトシって親父さんのこと父上って読んでたっけ?」

俺のベットに座りながら携帯電話とパソコンで遊んでいるタイトが言
った。

「くそ…ここで…終わるのか…」

せっかく買って下さったのに…

そんなことを考えているうちに目頭が熱くなってくる。

「おま…泣くんかい」

だが泣くはずもない。こんなことで泣いたらガキンチョ以下だ。

やはり新しいPCを買うしかないのか…

だとしたらやはり高性能だな。

「父上の手はもう借りない。自分の手で買ってみせる！」

俺は椅子から立ち上がり、ガッツポーズをした。心に刻みこむのには一番いい手段だと思う。

「おお、コンビニバイト2日でクビになったスゴ者がやる気になった」

「馬鹿者！それを言っなよ…」

そうだ

こんな馬鹿げた理由から全て変わってしまったんだ…

何もかもが…

いつもと変わらないうるさい場所。

授業の間の短い休み時間でも、過ごせないのが学校だ。

シャーラップ！

とか

その腐った口を切り落としてやろうか？

なんて言葉は99%口から出そうにない。

まあ、席が一番後ろっただけは唯一の助け舟だ。

こうして携帯でネットサーフィンをし、今一番の心の障害を取り除こうとしている。

金儲け

できるだけ多く、だ。

それも簡単に、やっていて苦にはならないのがいい。

寝れない夜、サギや窃盗なんかも考えてみ…

いや、他人を不快にさせるシゴトはしたくない。悪いことはしないで、効率よく稼ぐのだ。

「キャッチングうー」

後ろから携帯をひったくられた。

それも一瞬、手のひらからテレポートしたみたいに…

「なっ…。貴様いったい何者だ!」

突然現れたひったくり犯の顔を確認するため、神業とも言える速さで振り向いた。

「バイトさんの? コンビニ2日でクビになったのに?」

「なっ…」

隣のクラスの…誰…

いや、今まで3年間、一度も見たことのない女が俺の携帯を拉致していた。

「返せ…ってあんた誰?」

長い髪は女神のようで…って見とれている場合ではない。女性との付き合いは少なくとも、今は金で精一杯なのだ。

「バイト、紹介しよつか?」

そう彼女が言った瞬間、気分が変わった。

普通にネットで調べるよりは気が楽に面接とかできる。というか面接が問題だった。

「フッ、いいだろう。その話、乗ったあ！」

これで無駄に時間を掛けなくて済む。

「それじゃあ…はい」

シゴトの恩人がもの凄い速さで俺の携帯を操作し、そして放り投げるように返した。

「メアド入れといたから連絡してね。いつとくけど絶対放課後ね」

言い捨てるようにして彼女は教室から去って行った。

そして代わりに教室の前からタイトがニヤけながらヘラヘラと近寄って来た。

「おおっと？彼女できちゃった？」

どうやらタイトは勘違いが大好きらしい。

「お前何かヘンなことしたか？」

『バイト募集！』なのはタイトにしか話していない。

「まあね。なんかあったのか？」

「ありすぎて嬉しいくらいだよ。ハッハッハ」

タイトがあの女に教えたのだろうか？。まあ好都合なので今は感謝しておこう。

「学校の裏掲示板に『2組のトシがバイト募集してるよ』ってカキコンデおいた」

「なにしてんじゃアホオ！」

裏掲示板って言ったたらあれだ。人を貶し、悪口や秘密を書き込む暇人の居場所だ。

「いやあ…、誰かしら反応してくれると思ったから。手間が省けるだろ」

タイトは指でVを作り、にっこり笑った。

「ああ… やつちまったな…。書き込み消しとけよ…」

もう遅いか…。まあ、あの女が紹介してくれたのだけは良い出来事だ。

「了解、了解」

笑いながらタイトも去った。

今日は運が良いのか悪いのかわからないな…。

くだらない授業は頭に入らない。

あの女が紹介してくれるバイトはどんな内容なのか？。人と向き合うのはあまり好きじゃないから、範囲は限られてしまう。

それに金額も問題だ。あまりに安かったらどうしようか？。

そんなことを考えているうちに授業なんてすぐに終わってしまった。

『勉強なんてクソくらえ』ってワケでもないが、今日はいつも以上に頭に入らない。

この世界では金が一番モノを言う。

まあ、今は自分の欲望のために稼ぐんだが、いつかは人のために稼ぎたい。

家族とか、普通の生活で人生を終わらせる。

それが一番普通だ。

でもたまには刺激も必要だ。

金を使つてね…。

放課後、学校を出て、近くのアーストフード店に向かった。

6時間目の国語の最中に女からメールが来た。マナーモードにしていなかったら死んでいたところだ。

いつも一緒に帰っているタイトは先に帰らせ、尾行が存在しないことを確認する。

そしてファーストフード店に着くと、メールに書いてあった一番奥の席に向かう。

この時間帯は人が少なく、学校帰りの高校生が何組か居るだけだ。

メールどなりに女が一番奥の席に座っていた。目は携帯に釘付けのようだ。

「ポテト嫌い？」

彼女は片手で座れとジェスチャーし、机に置かれたポテトを指差す。

「指が汚れるからあげる」

なぜ彼女がポテトを頼んだかは知らないが、いららないと言っているのもらうことにした。

「それじゃあさっそく本題にいくわ」

トシアキは生暖かいポテトを口に運びながら耳を傾ける。

「あなた家族居る？」

いきなり質問をされた。

「母だけな・・・」

父は死んでしまった。

あまりにも早すぎる死だ。それもガンで、知った時には遅かった…。

「そう…。家を離れても大丈夫？」

「3日ぐらいなら大丈夫だと思う」

母は朝も夜も家に居ない。たまに帰って来るが、それは仕事終わりで、寝に來ているのだ。

我が家ではこれが普通。だから飯はおろか家事は自分でしている。

「それならちょうどいいわね。さっそくだけ場所を変えましょう」

名前も知らない彼女は席から立ち上がると、携帯をいじくりながら店から去ろうとした。

急いで席から立ち上がり、彼女の後を追いかける。

机の上にはまだ食べ残しなどがあるが、店の店員が処理をしてくれるだろう。

店から出ると、彼女は壁にもたれながら携帯を高速で操作していた。そんなに重要なことでもあるのだろうか？。

「あれに乗って」

彼女は空いた片手で前方を指で示す。

「こっちだよー！」

そこには一台の黒の外車が止まっていた。運転席からサングラスを

掛けた男がこちらに向かって手を振っている。

「ほら、行つて」

そう彼女は言った。素直に従い、サングラスの運転手の後部座席に乗り込む。

「先に行つてますよー！」

運転手は外に向かって叫んだ。

外の彼女に運転手が伝えた後、車は動きだした。

シンプルな内装の車だが、香水の匂いが狭い空間を埋め尽くしていた。

それに大音量の洋楽が運転手の好みを語る。

「新入り？今度は高校生かよ…」

運転手はチラツとこちらに振り向き、舌打ちした。

「最近は刺激が足りないんだよ。きっとそうだ」

運転手は一人で喋りだす。

「行くのも一人だし、どんだけ一匹狼なんだよ」

運転手の独り言は目的地に着くまで続いた。

20分ほどだろうか？。絶え間なく彼は愚痴らしきことを口から吐き出した。

外の景色で時間を潰そうとしたが、ビルが立ち並ぶ景色はあまりにもつまらなかった。

「到着。1万と5千円です」

運転手はあるビルの前で車を止めた。

「いや、やっぱり2万か…」

運転手は高額な金額を言い渡した。その前にタクシーだったことも知らなかった。

「あの…そんな金持っていないです…」

素直に答える。紛らわすだけ無駄だからだ。

「ハッハッハ、冗談だよ」

運転手は大声で笑った。ウソで本当に助かったと思う。

「じゃ、グッドラック」

彼はハンドルを握っていない右手で車から出ると指示をだす。

「ありがとうございます」

お礼を言って車から出た。送迎は何年ぶりの出来事だった。

外車はすぐに走り去り、あっという間に見えない距離まで行ってしまった。

「これからどうすればいいんだ・・・？」

ビルの前で下されたが、どうしろとは聞いていない。

ボロい6階建てビルで、テナントも一番上の一件以外カーテンが閉まっている。

「あそこか・・・」

そこしかない。このビルで下されたのだから、あそこに行けということだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546r/>

LINE OF DEATH

2011年10月8日20時49分発行